

日本と中国の大学における「第二外国語」の習得の現状と課題

—アンケート調査に基づいて—

王 瑾

0. はじめに

文部科学省が打ち立てた「大学入試選抜改革」はいよいよ2020年度から始まる。センター試験が廃止され、代わりに新しい大学入試共通テストと呼ばれる試験が行われることに決定した。この大学入試改革の根底には、正しい知識を覚えれば解けるという「知識偏重」の教育を脱出して、活用する力を伸ばそうという考え方にあると思われる。とりわけ英語の入試が従来の「読む」、「聴く」という技能だけではなく、「書く」、「話す」といったより発信できるような英語力が必要になってくる。また英語力の伸びとともに大学では英語以外の「第二外国語」の実力を求められるようになってくる。本稿では日本における「第二外国語」教育としての中国語の現状について、中国語を「第二外国語」として受講している日本の大学生に対し、アンケート調査を行った。また同様なアンケート調査を、日本語を「第二外国語」として受講している中国の大学生に対して行った。それぞれの国の大学生の「第二外国語」学習目的、学習意欲および学習方法の違いを比較分析・考察を行った。

1. 日本と中国語における「第二外国語」としての実態

1.1 日本における「第二外国語」としての中国語教育

カリキュラム上の位置づけとして、従来の用法に従って、第一、第二外国語という区分を使った。大学によって英語と外国語と区分するところがある。

文部科学省は、2013年小学校における英語教育の拡充強化、グローバル化に対応した英語教育改革計画の実施計画を発表した。2015年文部科学省教育課程企画特別第9部会で、新しい学習指導要領に、「英語以外の外国語」、「第二外国語」の重要性が認識されるようになった。現在、日本における「第二外国語」として選択することが出来る外国語は大学によって異なるが、言語別に見ると中国語が最も多く、次はフランス語、あとはドイツ語、韓国語の順である。

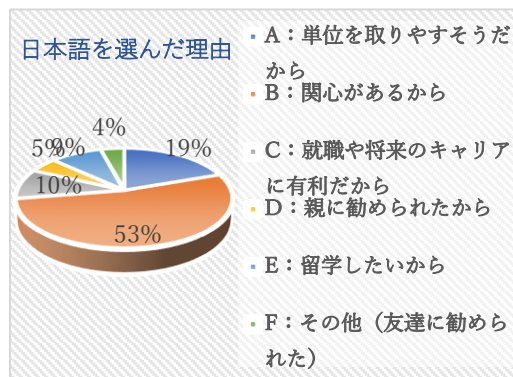
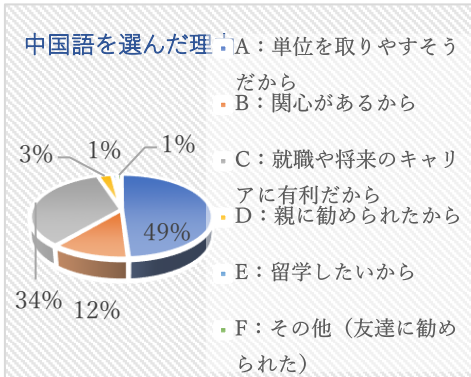
1.2 中国における「第二外国語」としての日本語教育

中国の大学における「第二外国語」の教育制度は日本と異なる。いまだに統一的な大綱がないのが現実である。「第二外国語」の位置づけは一般的教養科目（非外国語専攻）のもの（外国語専攻）の科目としての「第二外国語」の二つに分かれる。「外国語専攻」の科目としての「第二外国語」は必修科目であり、選ぶ外国語が多く、主に英語、日本語、ドイツ語、ロシア語など。一方「非外国語専攻」の科目としては一般教養外国語の選択肢が少ないのが現状である。「第二外国語」としての履修者数は日本語が最も多い。

2. 日本と中国における「第二外国語」の習得現状と比較

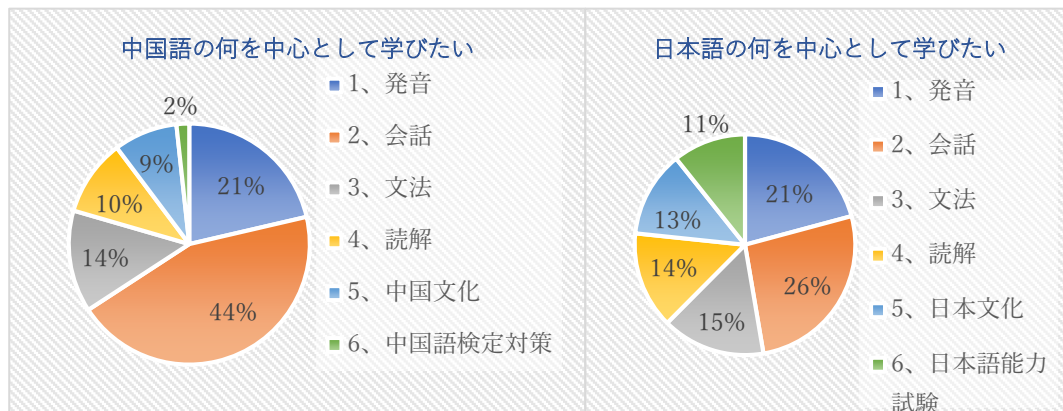
分析の方法として日本の大学生と中国語の大学生にアンケート調査を実施した。学習目的を明確にするためのアンケート結果のグラフは以下の通りになっている。

2.1 「第二外国語」として中国語を選んだ理由、日本語を選んだ理由



日本の大学生が中国語を選んだ理由の中では単位を取りやすそうだから（49%）が最も多く占める。就職や将来のキャリアに有利だからが、34%で二番目に多く占める。一方中国の大学生が日本語を選んだ理由で最も多いのが日本に関心があるから（53%）に対して、日本の大学生が中国に対する関心は僅か12%にとどまった。前期講義だけにしても、関心度の低さに注目したい。

2.2 また両国の大学生は何を中心として学びたいのかを以下のグラフの結果である。



外国語の勉強はコミュニケーション能力を養成するために話す力が欠かせない。日本の大学生は会話を中心として学びたいのは44%が占めている。

3. 分析及び考察

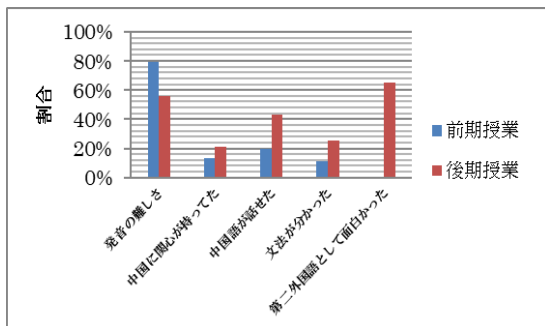
アンケート調査を踏まえ、学習者が積極的に取り組む学習方法を考える必要があると考えた。後期授業の一つの改善策として、自己発信型プレゼンテーションを導入することを試みる事にした。

3.1 プレゼンテーションのテーマとして、後期教材の内容に併せて、学生が比較的着手しやすいテーマにした。今回のテーマは「私が好きなの〇〇」（我喜欢〇〇）とした。事前に中国語で作文を作成させ、それに基づいて、プレゼンテーションを行う。プレゼンの評価は五段階のチェック項目表を事前に追加、学生に配布した。学生全員評価に参加させた。

チェック項目	発音	流暢さ	内容	分かりやすさ
五段階				
5	声調、発音を守り、正確に言えた	中国語の抑揚を留意し、流暢に言えた	起承転結がはっきりして、何が好きかよく説明ができた	分かりやすく個性あふれる工夫があった
4	声調、発音の間違えが三ヶ所以内	流暢に言えたが、つまずきがあった	好きなものがどうして好きか説明ができた	自分の好きなものを伝えることが出来た
3	声調、発音の間違えが五ヶ所あった	途切れが少しあった	好きだというだけでその理由が伝えきれなかった	好きだというが、うまく伝えることが出来なかった
2	声調、発音の間違えが五ヶ所以上	途切れが多かった	内容はあるもの、好きな理由が伝わってこなかった	何が好きなのか、どう好きなのか伝わってこなかった
1	発音が全くできていない	最後まで言えなかった	何を言いたいのかわからない	何が好きか全くわからなかった

(チェック項目表)

3.2 プレゼンテーションを実施後、後期に再度アンケート調査し、学習効果がアップしたかどうかその結果を前期

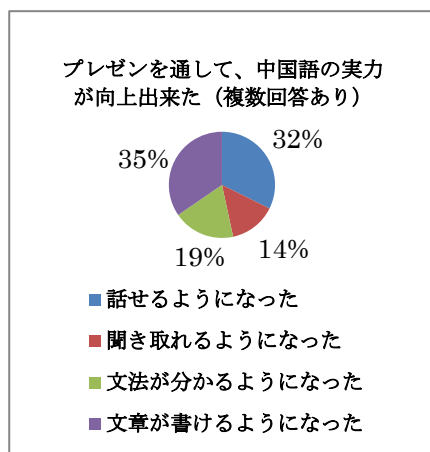


期アンケートと比較分析した。縦軸の青線は前期授業、赤線は後期授業である。発音の難しさが後期授業を通して改善されたことが分かった。また中国への関心も、中国語が話せたことも、文法が分かったことも後期にいずれもアップ出来、一定の学習効果が見られた。日本語の文字入力はローマ字入力が一般的である。中国語はピンイン入力で、漢字を変換するのが普通である。初級段階の学習者にとってはたやすいことではない。正確な

ピンイン入力ができないと漢字の変換が出来ない。今回後期にプレゼンテーションを行うにあたり、その原稿作成中、9割の学生が中国語のピンイン入力できた。それによって正確なピンインを身につけ、発音の勉強に大変有効的であったことがわかった。

4. 終わりに

従来、外国語を習得するための初級段階に四技能（聞く、話す、読む、書く）をプログラムに取り入れることが難しいと言われている。今回、プレゼンテーションを導入したことにより、学生たちの自己評価を表すグラフのように四技能のレベルアップに結び付けることができた。初級段階でもプレゼンの導入は学習方法として有効



であると考えられる。「第二外国語」の勉強が一年間という限られた時間に何をもっとも効果的に勉強したら良いのか定めるのは難しい。「第二外国語」だから、単位が取れたらいいという前期アンケートにあったように軽視されることがある。しかし学習内容をより実用的な、より学生たちに関心を持たせる方法を中心として考えていかなければならない。今回実施したプレゼンテーションの導入は一つの試みに過ぎない。大学入試の英語では資格・検定試験による4技能の総合的な能力、自分から発信できる能力を問われるようになった今日、「第二外国語」の学習内容の枠組みも再構築する必要がある。学習者の就職、キャリアアップなどのスキルを増やすために、いまだからこそできる学習方法を探らなければならない。今後更なら研究を続け、第二外国語としての中国語教育に役立てたいと考えている。

参考文献：

- 三浦 淳 (2004年)『人文が学研究』(新潟大学人文学部)第114期「第二外国語教育を壊滅から救い、新たな制度とイデオロギーを生み出すために」
- 田中慎也 (2003年)『大学「外国語教育」と「大学外国語」教育』「桜美林大学産業研究所 産研通信」N056
- 李戦軍、任鋒、趙国齐 (2012年)「日本大学公共第二外語教育現状及我国大学公共外語教育的啓示」保定学院学报第25卷第4期 p120
- 鄭社養 (2005年7月)『改革と戦略』「大学第二外語の現状及び改革方略」 p62, 63
- 国際交流基金ではHPにて全世界の日本語教育についての情報、教育制度と外国語教育、教科書、教師などの項目について、1年に1度掲載内容の更新を行っている。「国際交流基金 HP 日本語教育国・地域別情報」
- 竹田 宗継 (2014年)同志社商学第65巻第5号「経済のグローバル化と第二外国語習得の意義について」 p65, 66
- 張 軼欧 1994年『外国語教育フォーラム第6号「第二外国語としての中国語の初級教育における問題と対策」 p69~85